

ウリポ（潜在文学工房）から ウバポ（潜在マンガ工房）へ

ルイス・トロンダイムにおける潜在性

中 島 万 紀 子

さまざまな Ou-X-Po

レーモン・クノーとフランソワ・ル・リヨネは1960年に「ウリポ（OuLiPo、Ouvroir de littérature potentielle（潜在文学工房）」を創設した。言語に関してさまざまな制約、規則を課すことで、言語活動の潜在的な可能性を探ろうという活動をおこなう集団で、有名な詩句の母音だけ、あるいは子音だけを変化させて「新しい」詩句をつくりだす「等母音法」「等子音法」や、原テキストの名詞を、特定の辞書の中でのその名詞から数えて7番目に載っている名詞に置きかえて「新しい」テキストをつくりだす「S + 7」の技法などが代表的なウリポの「作品」として思い起こされるほか、ひとつの些細な出来事を99通りの文体で書き分けたクノーの『文体練習』⁽¹⁾や、10篇の14行詩の一行ごとに切込みを入れて、1000兆通りの組み合わせを可能にした『1000兆の詩篇』⁽²⁾、また、あとからメンバーに加わったジョルジュ・ペレックの、「e」の文字の使用を徹底的に廃した（しかもそれに気づかせることなく読ませる巧みさをもった）小説『失踪』⁽³⁾なども、有名なウリポ的作品として知られている。⁽⁴⁾

このウリポの活動や作品についてはご存知のかたも多いと思うが、じつはこれにならって、さまざまな Ou-X-Po（あえて日本語表記してみれば、ウなんとかがポ、といったところだろうか）ができ、今も一部は活発に活動しているという事実は、それほど周知ではないのではないだろうか。しかし実は、1973年に「ウリポ」創立者の一人である数学者のフランソワ・ル・リヨネが名誉会長となって「ウリポポ OuLiPoPo、Ouvroir de Littérature Policière Potentielle（潜在警察文学工房）」ができたのを皮切りに、1974年に「ウシポ OuCiPo、Ouvroir de Cinéma Potentiel（潜在映画工房）」が、1981年に「ウパンポ OuPeinPo、Ouvroir de Peinture Potentielle（潜在絵画工房）」がつくられる。その後しばらくこうした動きは鳴りを静めたに見えたが、まさに潜在的に進行していたようで、1990年代に入って、次から次へ、によきによきと色々な Ou-X-Po が誕生したのである。以下にさまざまな Ou-X-Po を年表風にまとめてみたものを掲げる⁽⁵⁾。

1960年：レーモン・クノーとフランソワ・ル・リヨネが「ウリポ OuLiPo（潜在文学工房）」を設

- 立。ジョルジュ・ペレック、イタロ・カルヴィーノ、マルセル・デュシャンらも参加。現在の主なメンバーはノエル・アルノー、ジャック・ルーポー、フランソワ・カラデクラ。
- 1973年：「Ou-X-Po」の最初のパリエーションとして「ウリポポ OuLiPoPo (潜在警察文学工房)」名誉会長にフランソワ・ル・リヨネ。
- 1981年：「ウバンポ OuPeinPo (潜在絵画工房)」メンバーはThierry Foulc, Jacques Carelman, Jean Dewasne, Tristan Bastit, Jacques Vanarsky.
- 1990年：「ウキュイポ OuCuiPo (潜在料理工房)」ウリポのメンバー、ハリー・マシューズとノエル・アルノーのふたりだけらしい。
- 1991年：「ウトラポ OuTraPo (潜在悲喜劇工房)」主なメンバーはStanley Chapman, Milie von Bariter, Cosima Schmetterling, Jean-Pierre Poisson, Anne Feillet, Mysta L. Chenapan, Nita Le Nelfe, Félix Pruvost, Sir Tom Stoppard.
- 1992年：「ウバポ OuBaPo (潜在漫画工房)」この工房についてはのちに詳述する。
- 1993年：「ウイスポ OuHisPo (潜在歴史工房)」ウリポのメンバー、ポール・ゲイヨがいる。
- 1995年：「ウフォポ OuPhoPo (潜在写真工房)」主なメンバーはPaul Edwards, Catherine Day, Paul Day, Marc Décimo, Gila, Gersan Moguérou, Yves Simon, Marcel Troulay. Correspondant Stanley Chapman.
- 1997年：「ウアンポ Ou'InPo (潜在情報科学工房)」
- 1997年：「ウシポ OuCiPo (潜在映画工房)」。メンバーはValéry Faidherbe, Gila, Rita Krout, Sioçnarf Drarig et Fatima Ben Ben Rien.
- 設立年不明：「ウミュポ OuMuPo (潜在音楽工房)」メンバーはPierre Barbaud, Michel Philippot, Andrew Hugill, Gavin Bryars, Philippe Cathé, Christopher Hoobs, Catherine Gilloire, Loribusier, Hercule Tac, Didier Bessière, Jean-Raphaël Bobo, Eric Boulain, Bertrand Grimaud, Dominique Gruant, Patrick Guyho, Franck Pruja, Bertrand Sauvagnac, Françoise Valéry.
- 設立年不明：「ウマポ OuMaPo (潜在マリオネット工房)」ウリポメンバーのジャック・ジュエが参加している。
- 設立年不明：「ウリポリポ (潜在リビア = ポーランド文学工房)」メンバーはPierre Bazantay ひとりのもよう。
- 1998年：「ウカ(タ)ポ OuCa(ta)Po (潜在大惨事工房)」代表は「ウバンポ」のメンバーでもあるTristan Bastit.
- 1999年：「ウピポ OuPiPo (潜在尻学? Pygologie 工房)」Michel Botollier による。
- 2000年：「ウティポポ OuTypoPo (潜在印刷術工房)」Christian Laucou による。
- 2001年：「ウアルクポ OuArchPo (潜在建築工房)」メンバーはLaila Belmouaz, Benoit Maillard, Jean François Blassel, Odile Fillion, Jacques Hondelatte, Alain Potoski, Florence Lipsky, Pascal Rollet, Richard Scoffier, Nicolas Tixier, 「在外潜在連絡員(ロンドン)」はEnrique Walker.

2002年：「ウグラポ OuGraPo (潜在文法工房)」

このほか、現在でもポール・ゲイヨらが「OuGéoPo (潜在地理学工房)」などの設立を準備しているという情報などがある。

絵画をテーマとする「ウバンポ」は、Tristan Bastitの説明によれば、毎月パリで会合を開いており、活動としては「拘束 (contraintes)」と呼ばれる制約を、絵画制作において探求することを主としているという。ウバンポの活動自体が作品を生み出すのではなく、「方法論、仕掛け、技巧、構造、形式的拘束」を作り出すことによって、それぞれのメンバーの「本業」たる絵画制作にそこで得たものを反映させるそうである⁽⁶⁾。ウバンポももっとも活発に活動している Ou-X-Po のひとつであるが、美術の分野での制作とは、マルセル・デュシャンらを例に引くまでもなく、もともと「潜在的」なものごとに着目するような性質のものではなかったろうか。「ウバンポ」のメンバーはその点、純粋に方法論的な意味で「潜在性」の研究をしているようであるが、ウリポが言語に関しておこなった活動を美術の分野に当てはめたような活動の中でも、もっとも先鋭的なものを最近目にしたので付記しておく、ロシア出身の「コマル&メラミッド」は、各国でアンケートをおこない、その結果をもとに、各国の人たちが「一番好きな絵」「一番嫌いな絵」というのを制作したり、象に絵を描かせたりしている⁽⁷⁾。これはまさしく美術における「ウリポ的」試みではないかと思われるが、こういうことを Ou-X-Po と「銘打って」やるか否かという問題も考えさせられる。意識的ではないが Ou-X-Po 的、という活動は世の中にもいくらでもあるはずであり、意識的な活動と無意識的な活動をそれぞれどう捉えるか、ということも一考に値する問題である。

「ウキュイポ」⁽⁸⁾はウリポのメンバーふたりからなるウリポの分科会のような感じだが、ペレックが長生きしていたら絶対に参加したであろうような活動である。というより逆に、この会自体がペレックの影響下にできたであろうことは想像に難くない。というのも、ペレックはウリポ的な枠組みの中ですでに「初心者のための81のレシピ」という作品をものしているのだが、これは3種類しかない書き出しの文章からスタートしてさまざまな「料理における定番表現」を組み合わせ、ついには81通りの料理の作り方を実現したものである⁽⁹⁾。そのほかペレックには、一年間でみずからが摂取した飲食物をリストアップした、ある意味圧倒的な作品などもあり⁽¹⁰⁾、その食に対する関心の高さをうかがわせているだけに、「ウキュイポ」に参加していたらさらにどんな驚きを提供してくれたらうかと、ここでもやはりペレックの早世が惜まれる。

演劇の「ウトラポ」も、数ある Ou-X-Po の中でもっとも「真面目に」活動を続けている団体のひとつである。機関紙「Outrapos Revue」は2000年までに9号を数えるほどになったし、「ウトラポ」という枠組みでの劇の上演、ウリポとの共同シンポジウム、展覧会などもおこなっている模様である。

歴史の潜在性をさぐる「ウイスポ」は、考えようによっては恐るべきくらみを生み出しそうにも見えるのだが、むしろ、無意識的に歴史の潜在性を立体化して盲信してしまうことのほうがずっ

と恐ろしいということをしみじみ感じさせてくれるほど、のんきな内容を提示している。この団体の活動のひとつに「クレオパトラの鼻」演習、というものがあるが、これはパスカルの「クレオパトラの鼻がもう少し低かったなら、地球の全表面は変わっていただろう」という有名な文句をヒントに、ある歴史上の事件が起きなかったら、世界はどう変わっていただろうかという推論を展開するというものである（彼らはこれを「歴史的リプログラム」と名づけている）。中世と近代の分かれ目となったとされる3つの事件を例にあげてみるものの、「コンスタンティノーブルの陥落」と「印刷術の発明」については「起こらなくても何も変わらなかった」とし、「アメリカ大陸の『発見』」については、「禁煙や、ガムのポイ捨て禁止などといったものが出現しなかったであろう、なぜならタバコやゴムはアメリカで発見されたものだから」という控えめな（ふざけた？）指摘にとどまり、「よく、蝶の羽ばたきひとつで歴史の流れが変わる、などと言うが、この試みからは、あいにくと大した成果が得られなかった」などという結論に達している⁽¹¹⁾。ウリポ的、あるいはクノー的な遊戯の精神を受け継いでいるグループといえよう。

写真を題材とする「ウフォポ」は熱心な活動を繰り広げており、機関誌「L'Ouphopo」も2000年までに8号を数える。さまざまな制約を定めたいえでの写真表現を追求しており、演劇と写真の組み合わせの試み（ジョルジュ・ロデンバックの『死都ブリュージュ』の登場人物を写真であらわすなど）もおこなっているようである。

映画に関する Ou-X-Po は、当初フランソワ・ル・リヨネが「ウシネポ」の名称で構想したが発足せず、1997年になって「ウシポ」が設立された。しかしこれまでのところこの団体のまとまった活動の成果などは発表されていない。「ウミュポ」も同様にフランソワ・ル・リヨネの提唱でウリポの初期に一度設立されており、その歴史は複雑なようであるが、そのわりには活動内容については詳細不明である。

マリオネットの潜在性についての「ウマポ」と、「潜在リビア＝ポーランド文学工房」たる「ウリポリポ」については紙面を割くことができない、というのも、前者はまだなにもしていないようであるし、後者はといえば、おそらくは（いや絶対に）「ウリポリポ」という音を出したいがために、こんなにも限定された分野の工房を（しかも Pierre Batanzay なる人物がひとりで）名乗って出たのだらうという憶測から逃れられないからである。

「ウカ（タ）ポ」は、災害というものは潜在的であり続けることもありうるという可能性の一方で、「バター付きパンが落ちちるとしたら、じゅうたんにぶつかるのは常にバターを塗ったほうの面だ」というような、「マーフィーの法則」的災害の潜在性を考えるグループらしい。それでどうなんだという気がしないでもない活動であるが、「ウパンポ」メンバーの Tristan Bastit が代表をつとめているので、下部組織のようなものとも考えられる。

どうやら尻を研究するらしい「ウピポ」に関しては、もはやどうぞ存分にやってくれと言うしかなさそうである。研究の成果をまとめたものが出たらぜひ見てみたいけれども。

潜在印刷術工房「ウティポポ」は、植字から印刷までをおこなう印刷工でもあり、シルクスクリ

ーンや版画、レイアウトなども手がけている Christian Laucou によるものだが、この人は Lefourneau という出版社の代表でもあり、コレージュ・ド・パタフィジックの会合で印刷術についての話をしたりもしているようだ。2002 年に 200 部限定で *Petit traité de mathématiques récréatives* 『気晴らしの数学小論』という本を、叢書名を「ウティボポ」として出している⁽¹²⁾。

潜在的な建築を考える「ウアルクポ」はうってかわって大所帯だ。2001 年にフランス建築学院でシンポジウムをおこなったもようである。

ウリポとクノーのある意味で正当な後継者ともいえる「ウグラポ」は、フランス語について考えるインターネットの掲示板でのやり取りから生まれたという経緯をもち、その成果もインターネットを通じて公開している⁽¹³⁾。もとはといえば、クノーが「ビザール」誌上で surjonctif という新しい(?) 文法上の法があると指摘したこと⁽¹⁴⁾が話題となり、それにならって新しい文法事項を作ろう(あるいは、指摘しよう)ということになったようである。ちなみに surjonctif とは、接続法(subjonctif)の半過去からつくられる、誇張のための法であり、接続法の代替物であるが、さらなる重みと美しさを文に与えるとされている。それはさておき、メンバーが実際に一堂に会する必要が、ほかのグループに比べても低いと思われる「ウグラポ」は、インターネットのもつ可能性(潜在性?)が生んだ 21 世紀型の Ou-X-Po の端的な例であると言えることができるだろう。

「ウバポ」とその広がり

さて、以上さまざまな Ou-X-Po を概観してきたが、ここでそのひとつである「ウバポ」の活動に焦点を当ててみることにする。

1992 年に「ウバポ」は誕生したが、「ウトラポ」と並んで 90 年代の Ou-X-Po 乱立ブームをよんだグループのひとつといえよう。というのも、「ウバポ」は設立直後から非常に具体的な実績を示し、持続的に、しかも広がりを持って活動しているからで、それがほかの多くの Ou-X-Po 成立を直接間接に促したと考えられるのだ。メンバーは François Ayroles, Anne Baraou, Stéphane Blanquet, Gilles Ciment, Jochen Gerner, Thierry Groesteen, Benoît Jacques, Killoffer, Etienne Léocroart, Jean-Christophe Menu, Lewis Trondheim といった面々で、1993 年 2 月からすでに 17 号出している機関紙に加え、今名をあげたうちの最後の 2 人、ジャン＝クリストフ・ムニュとルイス・トロンダイム、およびダヴィッド・ベー(David B.)らが起こした独立系のマンガ出版社ラソシアシオン(L'Association)から、「ウバポ」としての作品集がすでに 3 冊出ており⁽¹⁵⁾、3 冊目の『OuPus3 ウバポのパカンス』は、2000 年の夏にリベラシオン紙に連載されたものである⁽¹⁶⁾。さらに 4 冊目となる『OuPus4』が 2003 年の 11 月に刊行されたもようだ。

その活動は、あらかじめ決められた「拘束(contraintes)」とよばれる制約にしたがってマンガ制作をおこなうというものだが、たとえば「反復(itération)」という拘束は、あるひとつの要素(何

でもよいとされるが、往々にして画が選ばれることが多い)をすべてのコマにおいて繰り返すというもので、「ウバボ」設立に先立って出版された、ルイス・トロンダイム(シナリオ)とジャン＝クリストフ・ムニュ(画)の『生きるための四分の一秒以下』の一部が、この拘束を用いた典型的かつ一番知られた例といえよう⁽¹⁷⁾。これがきっかけとなってトロンダイムとムニュ、およびマンガの研究者でかつ拘束をつくりだすスペシャリストの Thierry Groesteen が核となり、「ウバボ」が誕生したという意義深い本である。

「回文(Palindrome)」の拘束は、文章での回文とはことなり、マンガのコマ単位でおこなわれ、しかも半分まできたところで折り返され、意味も展開も崩壊することなく整合性をもった作品にまとめることを要求する。つまりコマの進み具合としてはA B C D E D C B Aとなるわけである。

「折りたたみ(pliage)」という拘束は、1ページ上に印刷されたひとつの作品をまずふつうに読み、その後、指示に従って切ったり折ったりすると、また別の(あるいは最初の作品の続きとなる)作品があらわれるというものである。

「クロス・ストリップ(strip croisé)」は「折りたたみ」と同様、1ページ上に複数の作品を読むことのできる作品をつくる拘束だが、1ページ上にたとえば4かける4の16個のコマがあるとすると、水平方向、垂直方向、あるいは斜め方向などに読むことができ、いくつもの4コママンガが読めるという趣向である。François Ayrolesは4かける4の16コマの画面で、左から右への一定方向しか読めない作品でありながら、各行の中でどのコマをとって組み合わせてもいいという組み合わせの理論を使って、1ページ上に256通りの4コママンガを実現した⁽¹⁸⁾。これはまさしく、先に触れたレーモン・クノーの『1000兆の詩篇』を思い起こさせる試みであり、1ページ上での最大限に近い潜在性を引き出しているといえよう。

ウリボの遺産を直接に引き継いでいる拘束としては、さきにあげた「S+7」がある。これはそのままマンガのテキスト部分に当てはめることができるとして、「ウバボ」でも採用されている。

また、既存のテキストに手を加えるという作業もウリボで行われていたことであり、レーモン・クノーはマラルメの「白鳥のソネット」をほとんど脚韻部だけに「縮約」してみたりしているが⁽¹⁹⁾、「ウバボ」でも Gilles Ciment が、「タンタンの冒険」シリーズの『ファラオの葉巻』をたった6コマに縮約するという作品を披露している⁽²⁰⁾。

「水増し屋(tireur à la ligne)」の拘束は、まずはA1-A2という2コママンガを描き(A2はオチとなる)そこにBのコマを3つさしはさんでB1-A1-B2-A2-B3とする。さらにはCのコマをはさんでC1-B1-C2-A1-C3-B2-C4-A2-C5-B3-C6としていくのだが、それぞれ最後のコマはオチになっていなければならないし、どのパターンで読んでも整合性が破られないように気を配ることを要求されるのである⁽²¹⁾。Etienne Léocroartはさらに、この拘束にもうひとつの拘束を付け加え、AグループのコマのセリフはAから、BグループのコマのセリフはBから始まるようにしている。

Etienne Léocroartはアルファベットに関する拘束がお好みらしく、絵の「反復」の拘束を使いながら、片方の人物のセリフが「A、B、C、D…」と、アルファベットを順に唱えたときの音にな

るような作品を描いている⁽²²⁾。

ほかに、「アップサイド・ダウン (upside down)」という、まずふつうにそのページを読んだあと、さかさまにするとその続きがあらわれるというものや、「しっぽ囃み (morlaque)」という、その名の通り、最後のコマが冒頭のコマに続くことができ、つまりはぐるぐると果てしなく循環することができるというものなど、さまざまな拘束がある⁽²³⁾。

これらの拘束を見ていくと、ウリポと共通のアイデアもあるにはあるが、マンガでなければできないこと、マンガの「コマ」という単位があるからこそできること、に気づかされる。マンガでの回文や、「水増し屋」などが特にそうである。「ウバポ」は単にウリポのやっていたことのマンガ版というだけではなく、コマの特性を用いることで、マンガ特有の潜在性をさらに開拓したということができよう。

「ウバポ」はもっとも認知されている Ou-X-Po グループのひとつと言えるが、そこまでこの活動が盛んになった理由について少し考えてみたい。ひとつは、マンガという手段を用いることで、はじめから対象とする読者層が幅広いという点が考えられる。ウリポも認知度は低くはないものの、一種の文学運動という捉えられかたから抜け出せない部分があり、やはり多少文学に詳しい人の中でしか知られていないという印象があるが、「ウバポ」のほうは、一般的に話題にのぼる可能性が高いのではないだろうか。さらに、参加しているマンガ家たちの知名度の高さも、「ウバポ」が知られ、広がっていく大きな理由のひとつと言えるだろう。中でものちに詳述するルイス・トロンダイムは近年特に人気を博している作家である。

それから、やはり絵を用いているという点で、見るものの目に飛び込んでくるアピール性があることもあげられる。文字だけでさまざまな探求をおこなうよりも、絵を伴ったキャッチーなところが受けて、「リベラシオン」紙の連載などが実現するに至ったのではないかと考えられる。そしてこの主要紙での連載で、さらにその認知度が上がったことは確実である。

また、これはマンガの特性ともいえることでもであろうが、4コママンガをはじめとするギャグマンガの世界では「ひねり」「トンチ」「オチ」などが重要視されており、その伝統と「ウバポ」の精神がちょうどぴったり一致したということもあげられよう。文学においては、諧謔や遊戯の精神が必ずしも本流ではなかったということをかながみると、ウリポと、その対象たる文学との距離よりも、「ウバポ」とマンガの距離のほうがずっと近いのではないだろうか。ウリポの場合に比べて、ミスマッチや意外性という効果（「高尚」とされるマラルメの詩を、身もふたもないほど縮約しておかしみを誘うというような）は生まれにくいかもしれないのだが。

「ウバポ」の活動がほかの Ou-X-Po グループに比べて目を引くのは、前にも触れたが、設立から10年ほどですでに3冊の作品集を出版しているというその活況であろう。トロンダイムらの中心メンバーが独立系出版社を運営しているため、出版元を探す手間が要らなかったなどの要因もあるが、それよりもフランスの現代の若手マンガ家たちが身をおいている状況が、「ウバポ」活性化を促したのではと思われる。フランスでも、ゴシニーがシナリオを、ユデルゾが作画を担当した

『アステリックス』などに見られるように、シナリオと作画の分業、つまりひとつの作品における共同作業ということが広く行われてきたが、近年トロンダイムらの周辺でこのような分業/共同作業がますます盛んにみられる。ラソシアシオン社はパリのカンカンボワ通りに Nawak というアトリエを構え、一時期はそこでトロンダイムをはじめ、ダヴィッド・ベー、ジョアン・スファール (Joann Sfar)、クリストフ・ブラン (Christophe Blain)、フレデリック・ボワレ (Frédéric Boilet、現在は東京在住)、エマニュエル・ギベールらが、多少の入れ替わりをしつつも、ひしめきあうようにして仕事をしていたそうである⁽²⁴⁾。さまざまにコンビを組みかえては作品を生み出すという密な交流があるわけだが、ラソシアシオン社に関係の深いマンガ家たちに限らず、アングレームで年に1度行われる大規模なマンガのフェスティバルなどにおいても作家同士の交流は盛んであるようだ。そのことは「ウバポ」の活況とは無縁ではないように思われる。共同作業としての「ウバポ」のさまざまな企画が次々に実現しているのは、マンガ家同士が頻繁に交流しているという基本的な状況があってこそなのである。

そして「ウバポ」は海を渡ったのである。海とはつまり、大西洋と、英仏海峡であり、こうして「ウバポ・アメリカ」と「ウバポ UK」が誕生することとなった。「ウバポ・アメリカ」はなかなか活発に活動していて、web 上でさまざまな参加作品を見ることもできる⁽²⁵⁾。フランスの「ウバポ」がおこなってきた「縮約」や「アルファベット」に関する拘束、また、呈示された4コマの画だけを使って(同じものを何度使ってもよい)マンガを制作するという拘束などのプロジェクトに、それぞれ6~12もの応募がきており、また、「拘束」やその他のプロジェクトの提案なども歓迎しているようである。「縮約」のコーナーには、われわれにもなじみぶかいチャールズ・M・シュルツの「ピーナッツ」の世界をたった4コマであらわしたものもみられる。「ウバポ UK」のほうは、オフィシャル・サイトとしてあるアドレスでは現在調整中らしく⁽²⁶⁾、その活動内容は明らかではないが、「反復」の拘束での作品を web 上でも公開している Daniel Merlin Goodbrey⁽²⁷⁾が中心となっているようである。このほかの国でも「ウバポ」の組織ができていくのも時間の問題ではないだろうか。マンガ文化の華やかな日本について考えれば、赤塚不二夫などに「ウバポ」的的作品がいろいろとあるようにも思うし、また、中島らもが1980年代から『微笑家族』というタイトルで、同じ人物については同じ表情の絵を反復しながらマンガを描いていた⁽²⁸⁾。ウリポ的な言い方をすれば、これらは「ウバポの先取り剽窃」ということになるのだろうが、そうとは銘打たないまでも「ウバポ」的なことを実践しているマンガ作品は多々ありそうだ。日本でも「ウバポ」の認知度が上がり、日本のマンガ家が興味を持つようになればまた新たな広がりが出てきそうである。

ルイス・トロンダイムにおける潜在性

さて、さまざまな Ou-X-Po と、その中から特に「ウバポ」の活動を概観してみたが、その中か

らさらに、すでに何度か名前を引いたルイス・トロンダイムというフランスのマンガ家について紹介しきものを試みてみたい。

ルイス・トロンダイムは1964年、フォンテーヌブローに生まれた。22歳で広告の学校に入るが、在学中、スリジーで開かれたマンガのシンポジウムでジャン＝クリストフ・ムニユと出会い、今までとはちがったスタイルの、つまり、46ページでカラー、という形態ではないマンガを作ることができるという可能性に気づく。ムニユやStanislas、Killofferやダヴィッド・ペーらの作っていた「ラボ(Labo)」という雑誌にトロンダイムも加わり、このメンバーが1990年にラソシアシオン社を設立、翌年には先にも触れたアトリエNawakでほかの多くのマンガ家たちとの共同作業の生活を始め、旺盛な創作意欲を見せる。そしてこの間1992年には「ウバボ」が誕生、1994年にはアングレアムのマンガ・フェスティヴァルで、ラソシアシオン社から出した『スラローム』が賞を獲得、大手出版社のスイコ社、ダルゴー社と相次いで契約を結び、後者からは「ラピノのすてきな冒険」シリーズの刊行が始まる。みずから「仕事中毒」と認めるトロンダイムは⁽²⁹⁾、1996年の初めまでに2冊の「ラピノ」シリーズを刊行、そのほかにもスイコ社、ラソシアシオン社ほかからもさまざまな作品を出し続け、ロック雑誌Inrockuptiblesでの連載も手がける。97年からは、ジョアン・スファールやクリストフ・ブラン、マニユ・ラルスネ(Manu Larcenet)らと組んだ「ドンジョン」シリーズのプロジェクトが始動、デルクール社から次々と単行本(アルバム)が、2003年末までにじつに16冊刊行されている。いっぽうの「ラピノ」シリーズも9冊を数えるまでになっている。そのほかにも雑誌連載を集めた「ラピノ抜きすてきな冒険」シリーズが2冊、Monstrueuxシリーズが5冊、The Nimrodシリーズが6冊、Le Roi Catastropheシリーズが3冊、その他、旅行記「航海日誌」(Carnet de bord)シリーズも3冊出ており、2003年秋の来日の際のことをまとめた4冊目も、2004年4月に刊行予定とのことである。⁽³⁰⁾まったくもって驚くほかはない多作ぶりであり、しかもそのどれもが意外性や諧謔に満ちた秀作であることが、まさにこの作家の怪物的ともいえる才能の証左であるが、本稿ではその中からとりわけ「ウバボ」や潜在性とかかわりのある部分に着目してみることにする。

トロンダイムが「ウバボ」設立の中心人物のひとりであることや、彼がシナリオを手がけた『生きるための四分の一秒以下』という作品が、まさにその設立のきっかけとなったことについてはすでに述べたとおりで、マンガのもつ潜在性についてはとりわけ考えをめぐらせている作家のひとりであると言える。もちろん「ウバボ」の作品集*OuPus*でもその作品を多数寄せているし、本人の公式ホームページ上で、OuBaNetPoと題してネット上「ウバボ」作品を公開している⁽³¹⁾。これは画の上をクリックするごとに、異なる4コママンガがあらわれるというものだが、続けていくうちに、各コマについて数パターンあるものの組み合わせによって、かなりの数の作品があらわれているということに気づかされる。これはすでにさまざまな「拘束」のところで紹介した「クロス・ストリップ」の手法であるが、クリックするごとに任意の組み合わせがあらわれるというところに、コンピュータとインターネットを活用した呈示方法の面での新しさがみられる。

さて、「拘束」を設定することによって生まれてくる、そして生まれうるマンガ作品という潜在性については、「ウバボ」についての前項でもすでに見たとおりであるが、トロンダインにおいては、「ウバボ」とは直接に関係のない作品において、構想の面でも潜在性が指摘できるように思われる。たとえば、現在も激しい勢いで刊行されつつある「ドンジョン」のシリーズでは、「ドンジョン天頂編 (Donjon Zénith)」は第1巻から第4巻が、「ドンジョン黎明編 (Donjon Potron-Minet)」は「第 - (マイナス) 99巻」と「第 - 98巻」が、そして「ドンジョン黄昏編 (Donjon Crépuscule)」は「第 101 ~ 103巻」が出ている。各巻のナンバリングについて、はじめはなかなかその状況が把握できないのだが、これは、驚くべきことに、各編について100冊、つまり全部あわせて300冊「刊行予定」ということなのである。今よりさらに刊行のペースを上げて、かりに年5冊ずつ出したとしても、まだ50年以上かかるという壮大な構想で、さらにこのほかに、番外編の「パレード編」と「モンスター編」も、豪華作画陣を迎えて展開していることも付記しておかねばならない。シリーズものを長く続けていくという単純な話ではなく、シリーズの中における3つの点からそれぞれ語り始めるという手法によって、まだ語られていない「間の」部分、つまり潜在的な部分についても読み手に想像させ、シリーズものの潜在性を最大限引き出しているところみであると言えるだろう。さらに言えば、現実的に考えて、これは最初からほぼ不可能な構想であるということにも注目しておかねばならない。作家自身も「つまらなくなったらこのシリーズをあっさりやめるかもしれない」と述べているが⁽³²⁾、それはどういうことかといえ、シリーズ間のまだ語られていない部分が、ついに語られずに終わるかもしれないということ、潜在性がついに潜在性そのまま終わるということである。これは、単に作家たちが志半ばにして挫折するとか、思いつきでたてたプロジェクトを放棄するというふうに見えもするが、トロンダインの場合、もしそういうことになっても、確信犯的な所業なのではないかと思われる根拠があるのだ。そのキーワードもやはり潜在性である。

トロンダインの大きな魅力のひとつはストーリーテリングのたくみさであり、ケタはずれの想像力と皮肉かつ諧謔的な視点で、常に新鮮な驚きを提供してくれる。特に付言しておけば、今でこそ安定したデッサン力を見せるトロンダインだが、意外にも幼少時から絵を描いていたというわけではないため、絵の「トレーニング」⁽³³⁾をしようと500ページという無彩色の大著『ラピノとパタゴニアのニンジン』⁽³⁴⁾をものしているが、これは最初思いつきで少しだけ描くつもりだったところ、どんどんストーリーが広がり、それでいて破綻するどころかかえって密な構造と圧倒的な奥行きを得ていく過程が手にとるように感じられて異様な高揚感を誘う本である。これもまた、従来の「46ページでカラー」という従来のマンガの単行本(アルバム)の枠を超えて、500ページ描いてみたらどうなるか、という意味での潜在性の開拓ともいえるが、この本にはじまる「ラピノ」シリーズはとりわけ、物語の内容のレベルにおける潜在性ということを考えさせる作品群である。誰かほかのマンガ家との分業/共同作業ではなく、純粹にトロンダインひとりで⁽³⁵⁾取り組んでいる代表的なシリーズがこの「ラピノ」であるが⁽³⁶⁾、おおむねどの巻も日常生活にさりげなくひそむ潜

在性が、ふとしたきっかけから「潜在」でなくなり現実化したらどうなるか...という題材を扱っている。この稿では、なによりトロンダイム作品を読むのはこれからだという方のためにも、内容まで詳しく述べることは差し控えておく⁽³⁷⁾が、ともかくも物語の内容に関して、また、それにかぎらず、読み手の日常生活における潜在性についても考えさせるという特徴が指摘できる。「ラピノ」シリーズだけでなく、マニュ・ラルスネが作画を担当した『未来宇宙飛行士』⁽³⁸⁾というSF作品についてもこの特徴が顕著にあらわれているといえる。

しかしながら、特にSF作品においては一般に、映画「マトリックス」を例にとるまでもなく、普通に見えていた世界が実はこうであった...という構想や筋立ては珍しいことでもないし、その他小説、映画、マンガなど媒体を問わず、「平凡な日常生活を送っていた主人公が、ふとしたきっかけから...云々」というような、物語の内容レベルでの潜在性というものは、ありふれたものであるかもしれない。しかし、トロンダイムの作品世界における潜在性は、それだけでは終わらない。ふつうに考えれば物語の中心的な題材になりそうな事件が起こっても、そのことについては特にとりあげなかったり、解けないままの謎が残ったり、冒頭のことがらから予想されたような事件が実際に起きなかったりという事態が、とくに「ラピノ」シリーズでは顕著に見られ「ここでは描かれなかったけれども描かれたかもしれない物語」の可能性が、潜在的に示唆されているのだ。この特徴は、先に述べた「ドンジョン」シリーズにおける「いまだ描かれていない部分」についての潜在性につづるものであり、たとえトロンダイムが「ドンジョン 300 冊刊行」の遠大な計画を完遂しなかったとしても、それはこうした潜在性への目配せなのではないかと思わせるゆえんである。

さて、このような種類の潜在性を前にして思い出されるのは、「本家」ウリポの創設者、レーモン・クノーである。「ラピノ」における「ここでは描かれなかったけれども描かれたかもしれない物語」はまさしくクノーの『わが友ピエロ』などを思い出させるし、解けないままの謎については『はまむぎ』に始まり、『人生の日曜日』、『地下鉄のザジ』などクノーのほぼすべての小説作品にちりばめられている。また、先ほどトロンダイムの作品について指摘した、物語の内容レベルにおける潜在性も、『はまむぎ』、『わが友ピエロ』、『リュイユから遠く離れて』、『人生の日曜日』などに特に見いだすことができる。⁽³⁹⁾

クノーのウリポ的作品という、とかく言語に関する拘束からなるものばかりが取りざたされる傾向があるが、ジャック・バンスも指摘しているように⁽⁴⁰⁾、今しがたあげた、物語の内容に関する、あるいは小説の語り方に関する潜在性も、ウリポ的なものとして大きな意義を持つものと考えられる。その見地からすれば、トロンダイムはウリポ的精神を、もしくはクノーにおけるウリポ的精神を、もっとも網羅的なかたちで継承しているマンガ家ではないだろうか。トロンダイム本人も「拘束」については「クノーとウリポについては、『ウバポ』についてと同じくらいよく考える」と言っているが⁽⁴¹⁾、ウリポの枠外でのクノーの作品との間には意識的な影響関係があるのかなど、また詳しく聞く機会を得たい。

今しがた引いたジャック・バンスの論考にも、文学的潜在性を探求するひとつの形態として「パ

ロディ」があげられているが、「ラピノ」シリーズの最新作『原子力加速器』⁽⁴²⁾では、トロンダイムはついに、すでに古典となっているマンガ「スピルウとファンタジオ」⁽⁴³⁾のパロディに挑戦していることも述べておくべき必要がある。これからもマンガのどのような潜在性を開拓していくのか、今やフランスでは絶大な人気を誇っているトロンダイムからは、まだまだ目が離せない状況である。

以上、さまざまな Ou-X-Po および「ウバポ」とトロンダイムについて概観してきたが、結局のところ「潜在性」ということば自体のもつ潜在性の深さには、めまいのするような感をあらためていだかされる。今後も世界のあちこちで、さまざまな分野にわたって潜在性が追求されていくという事態を歓迎しつつ見守りたい。

註

- (1) Raymond Queneau, *Exercices de style*, Gallimard, 1947.
- (2) Raymond Queneau, *Cent mille milliard de poèmes*, Gallimard, 1961.
- (3) Georges Perec, *La disparition*, Gallimard, 1969.
- (4) ウリポについては、Oulipo, *La littérature potentielle*, Gallimard, 1973, および Oulipo, *Atlas de littérature potentielle*, Gallimard, 1981, 日本語のものでは松島征編、風の薔薇 5、「特集・ウリポの言語遊戯」水声社、1991 年を参照。
- (5) 人名については、日本ですでに定まったカタカナ表記があるもの、本稿で特に着目するものについてはカタカナ表記としたが、それ以外のものについてはアルファベットのまま掲載することとした。おもな参照先は http://worldserver2.oleane.com/fatrazie/Ou_X_Po.htm#OuBaPo および http://worldserver2.oleane.com/fatrazie/Calis_23.htm
- (6) Tristan Bastit のサイト、<http://www.kerys.com/bastit/oupeinpo.htm>
- (7) 2003 年「コマル&メラミッドの傑作を探して」と題した展覧会が川村記念美術館（千葉県佐倉市）で開催された。ちなみに、このコンビは、やはりアンケートをもとにして「一番求められている音楽」「一番求められていない音楽」を収録した CD を、作曲家のデイヴ・ソルジャー（Dave Soldier）の協力を得て制作しているが（Komar & Melamid and Dave Soldier, *The People's Choice Music, The Most Wanted Song, The Most Unwanted Song*, 1997.）コマル&メラミッドの絵画作品と同じくらい諧謔に満ちたものに仕上がっている。これは、特定の条件のもとで創作活動をおこなうという点で「ウミュポ（OuMuPo）」的な試みであるといえそうだが、当の「ウミュポ」のほうではどのような作品を生み出しているのか、筆者はいまだ把握していない。
- (8) *Bibliothèque oucupienne* n° 1, Plein Chant, 1990, *Bibliothèque oucupienne* n° 2, Plein Chant, 1996 のふたつの本が出ている。
- (9) Georges Perec, *Penser/Classer*, Hachette, 1985.
- (10) Georges Perec *L'Infra-ordinaire*, Seuil, 1989.
- (11) « Exercices d'Histoire potentielle », dans le n° 20 de *L'Expectateur* (15 septembre 1995).

- (12) Christian Laucou, *Petit traité de mathématiques récréatives*, Fornax, Outytopo, 2002.
- (13) 詳しくは <http://www.langue-fr.net/ougrapo/ougrapo.htm> を参照。
- (14) *Bizarre* n°27, 1^{er} trimestre 1963.
- (15) Oubapo, *OuPus 1*, L'Association, 1997, Oubapo, *OuPus 2*, L'Association, 2003, Oubapo, *OuPus 3 Les Vacances de l'OuBaPo*, L'Association, 2000.
- (16) *OuPus 2* に時間をかけている間に、新聞連載を単行本にした *OuPus 3* のほうが先に刊行されたかたちとなっている。
- (17) Lewis Trondheim & J-C. Menu, *Moins d'un Quart de Seconde Pour Vivre*, L'Association, 1991.堀江敏幸氏の訳でこの作品の一部を読むことができる。季刊「本とコンピュータ」誌 2002 年春号、トランスアート、pp. 104-105。
- (18) http://www.heeza.fr/BOUTIK/Fiches_Produits/ASSO/Oubapo3.html で、この作品をおぼろげながら見ることができる。
- (19) Raymond Queneau, *Bâtons, chiffres et lettres*, Gallimard, 1950, pp.339-340.
- (20) <http://gciment.free.fr/bdoubapo.htm> 参照。
クノーのマラルメ縮約版と同じく、もとのものを知らないともまったく意味がわからないという点でかなり脱力の笑いを誘う作品に仕上がっている。
- (21) http://www.heeza.fr/BOUTIK/Fiches_Produits/LECROART/Oubapo1.html で、この「水増し屋」の拘束からできた作品を垣間見ることができる。
- (22) セリフは順に « à baisser des...Heu...Eff... » « j'ai... » « Hachis ? Gika ?... » という具合になっている。
http://www.heeza.fr/BOUTIK/Fiches_Produits/ASSO/Oubapo2.html を参照。ちなみにジョルジュ・ベレックにまったく同じアイデアの戯曲がある。Georges Perec, *Les horreurs de la guerre* (Drame alphabétique en trois actes et trois tableaux), in Oulipo, *La littérature potentielle*, Gallimard, 1973, pp.111-114.
- (23) <http://membres.lycos.fr/atebedepow/oubapo.htm> 参照。
- (24) Gilles Ciment によるエマニュエル・ギベールのインタビュー中にそうした状況の描写がみられる。
<http://gciment.free.fr/bdentretienguibert.htm>
- (25) <http://www.oubapo-america.com/>
- (26) <http://www.oubapo.co.uk/>
- (27) <http://www.e-merl.com>
- (28) 中島らも『微笑家族』ビレッジプレス、1991 年。
- (29) 来日講演 (2003 年 10 月 23 日、東京日仏会館にて) の際の本人の言。
- (30) 略歴はトロンダウム本人のオフィシャル・サイトを参照。 <http://www.lewistrondheim.com/bio.html>
また、2003 年秋に川崎市市民ミュージアムで行われた「フランス・コミック・アート展」のカタログにも、トロンダウムやこれまで名前を引いたマンガ家たちについて、また「ドンジョン」シリーズについて、細萱敦氏による充実した解説が載っている。
- (31) <http://www.lewistrondheim.com/index2.php3>
- (32) これも来日講演 (2003 年 10 月 23 日、東京日仏会館にて) の際の本人の言。
- (33) 同上。「いくらなんでも 500 ページくらい描けばうまくなると思って」とのこと。
- (34) Lewis Trondheim, *Lapinot et les carottes de Patagonie*, L'Association & Le Léopard, 1992.
- (35) とはいえ、ほかの作品と同様、彩色はカラーリストがおこなっており、「ラビノ」シリーズの彩色

はアトリエ Nawak の時代に出会って結婚した妻の Brigitte Findakly が手がけている。ちなみに、『春のバカンス (*Les vacances de printemps*)』の巻だけ、シナリオに Franck le Gall を迎え、ほかの「ラピノ」作品とはちがった仕上がりになっている。

- (36) 今まで刊行された「ラピノ」シリーズの一覧は、トロンダ임本人によるもうひとつのサイトで見ることができる。<http://www.pastis.org/lewis/Lapinot.html>
- (37) 現在筆者は「ラピノ」シリーズの翻訳準備中である。
- (38) Lewis Trondheim & Manu Larcenet, *Les Cosmonautes du futur*, Dargaud, 2000. Lewis Trondheim & Manu Larcenet, *Les Cosmonautes du futur(2) Le Retour*, Dargaud, 2001.
- (39) 本文であげたクノーの作品を、年代順にあげておく。Raymond Queneau, *Le chiendent*, Gallimard, 1933 ; *Pierrot mon ami*, Gallimard, 1942 ; *Loin de Rueil*, Gallimard, 1944 ; *Le dimanche de la vie*, Gallimard, 1952 ; *Zazie dans le métro*, Gallimard, 1959.
- (40) Jacques Bens, « Queneau oulipien », in Oulipo, *Atlas de littérature potentielle*, Gallimard, 1981, pp.22-33.
- (41) 筆者とのメール交換で。2003年11月4日。
- (42) 2003年現在での最新刊。Lewis Trondheim, *L'accélérateur atomique*, Dargaud, 2003.
- (43) ベルギーのマンガ家フランカン (Franquin) の画で有名な、赤いベルボーイの制服の少年とその相棒で青いジャケットの少年のコンビ (いや、お供のリスも入れてトリオ) を描いた、子供向け人気シリーズ。とはいえこの名コンビを生み出したのはフランカン以前のマンガ家 (Rob Vel が 1938年に誕生させた) で、フランカンものちには後輩のマンガ家たちにスビルウとファンタジオを譲っている。フランカンほかに「ガストン」という、緑のトゥクリセーターでいつもおへそを出しているだらしのない人物を主人公にした人気シリーズを手がけている。